

大沢英一郎家文書目録と目録作成について

- 1 須坂市沼目町の大沢英一郎家は、近世初期から続く歴史に残る名門として伝えられる。過去帳によれば、天和二年（1682）の釈妙証信女がみられる。この頃には大沢家が存在したことの証であろう。江戸時代初期から続く旧家であったことはまちがいない。須坂藩の代官・手付けを申し付けられたのが大沢章兵衛のときで、文化11年（1814）のことである。しばらくして文政4年（1821）には、ときの学問所・教倫舎（心学講舎）を預かることになった。幕末期には、藩内に心学（通俗道德）を浸透させ、藩再興の役割を果たしてきたほか、須坂藩の経済的窮乏を救うために、たびたび献金も行い藩の信頼は厚いものがあつた。
- 2 本文書の最初期史料には、慶長6年（1601）文書のほか寛永3年（1626）覚（小笠原検地関連）、寛永5年（1628）沼目村地詰御帳がみられる。いずれも江戸初期の文書として注目される。沼目村の肝煎・名主関係文書のほかには、前掲の教倫舎や心学普及にかかわる文書や典籍等史料を大量に遺されているところに大沢家文書の特徴がある。心学断書（宝暦12年）、対策（明和2年）、心学問答控書（同3年）、棚卸元根草（享和1年）、御学問所御引渡之時覚御書付（文政4年）、学問所聴人留簿（文政10年）、京都明倫舎関係書簡（天保10～弘化3年）、心学手扣（天保12年）、印鑑（善導司・輔仁司・前講）（天保14年）ほかの文書である。
- 3 これら現存する史料を「大沢英一郎家文書目録」として目録を作成した。『須坂市域の史料目録』の連番整理番号「052」（52番目）に位置づけ、史料番号は「052-A-1」から開始して、整理ラベルを貼付した。
文書目録は、原則として時系列により配置して作成した。史料点数は以下のように1885点を数える。

記号	分類項目	総史料番号	史料点数
A I	江戸（～天保）	273	304
A II	江戸（弘化～慶応）	380	396
B	明治大正	294	294
C	昭和以降	274	284
D	典籍	607	607
	合計	1828	1885

4 本史料目録が、沼目町をはじめとする須坂市民、さらには、多くの地域史研究者によって活用されることを期待する。そして、すでに発刊されている須坂市史関係著書の叙述を超えて、さらに地域の歴史に輝きを添えられることを願ってやまない。

5 史料目録の作成に当たっては史料活用の便を考慮して、次のようにした。

(1) 史料名は、原則として史料中に記載された表題を記載したが、無表題史料には、次のように()をもちいて仮表題を作成して掲げた。

(沼目村絵図) (明倫舎関係書簡)

(2) 「記」・「覚」のみで内容無記載の史料については、次のように()内に内容説明を記載したものもある。

一札之事(薬師堂移転の件) 覚(御用金請取)

(3) 請取など切手まがいの一紙史料は、便宜的に括って整理したものもある。その場合は、次のように一枚目の史料名を記し、他の史料については「外○点」などと略記した。備考欄には「便宜括り」と記載しておいた。

上納金領収書、外5点 短冊、外10枚

(4) 史料形態については、次のように略記した。

横(横帳)、横半(横半帳)、 縦(縦帳)、 紙(一紙)、
封(封書)、 冊(冊子)、 綴(ジョイント含む) など

6 本史料目録は、大沢英一郎家のご理解とご協力を得て、須坂市誌編さん室の下記専門員が分担して作成した。

勝山一男 小林裕 涌井二夫 小林謙三
竹内正勝 井上光由

(編さん担当：青木廣安・丸山文雄)

2012年6月28日

須坂市誌編さん室